

ライドシェアサービス「チャョイソコ」の挑戦

——社会課題を解決し、移動に感動と笑顔をお届け

アイシン副社長

鈴木研司

すずき けんじ



私もアイシンは、数年にわたり自動車の電動化への変革、自動運転などの技術開発を進め、CASE事業へと邁進している。同時に、移動にまつわる社会課題が手付かずになっていることにも目を向け、少しでも私達が貢献できることはないかと実直に模索してきた。そんな中、特に高齢者の移動支援を課題と捉え、2018年7月に「チャョイソコ」というライドシェアサービスの提供を開始した。

まず高齢者の気持ちに寄り添うことが重要

昨今、地方における公共交通の衰退、免許返納後の移動、買い物難民、独居老人の孤独など、移動にまつわる高齢者の課題は顕著になってきている。高齢者は、行きたいところに出掛ける自由から取り残され、また人と触れ合う機会が損なわれている。加えて、利便性の提供とは別に、気持ちに寄り添うことが必要ではないかと考えるに至った。当時、

様々な町で高齢者の声を聞くと、薬局や医療機関への通院、カラオケ、体操教室、地域の集まりなど、いつまでも若々しく行動したいという想いは、若い人以上に強いことが分かってきた。

チャョイソコは、会員登録されたユーザーから予約を受け、専用システムが位置情報を活用して最適な乗り合わせと経路を計算し、目的地まで乗り合いで送迎するシステムである。図表に示すように、ワンボックス車両を利用し、タクシース会社に協力を仰ぎ、二種免許を持つているタクシードライバーの空き時間を活用している。単なるユーザーの送迎にとどまらず、運営会社やスポンサーが、高齢者の興味を示すようなカラオケ、体操教室、料理教室などの楽しいコトを企画し、活き活きとした老後の支援につながるように配慮している。ちなみに、チャョイソコというネーミングは、ちょっとそこまで一緒にという共感しやすい言葉から取っている。

異業種連携から学んだスピード感

チャョイソコの事業化にあたって、当社にとっても大きな学びが2つあった。

1つは、スピード感だ。自動車部品の開発・製造では、複数年かかる量産化のプロセスは、とすれば必要以上に丁寧だが、その間、課題の解決もなく、事業機会を失するリスクも大きい。チャョイソコの初めてのトライを推進するにあたって深く感謝したいのは、スギ薬局の皆様との出会いである。

地元のイベントで同席させていただいた縁から、高齢者を対象にした新たなサービスに向けた異業種連携がスタートした。プロジェクト進行に向けた同社のスピード感は驚くべきものであった。企画当初は、スギ薬局の専任者が当社のオフィスにはほぼ常駐し、経営企画の役員、自治体担当の部長の方々を含めたプロジェクトの運営会議が日々開催され、当社スタッフは付いていくのがやっとであった。

(注)CASE: Connected(コネクテッド)、Autonomous(自動運転)、Shared & Service(シェアリング/サービス)、Electric(電動化)

